

チベット大蔵経

原 田 覺

仏教学の研究者にとって、チベット大蔵経は研究の宝庫とされ、チベット訳仏典を利用した秀れた研究も、既

に多数の論攷が公刊されている。即ち多数のサンスクリット原典が失われた現在に於て、サンスクリット仏典の逐語訳と称されるチベット訳仏典は、インド仏教の原形を保存する貴重な研究対象とされ、さらに現存の梵語仏典を校訂する重要な研究資料とされて来た。果してチベット大蔵経は、その様な評価に耐え得るのであるうか、或はその程度の価値しか得られないのであろうか。問題の回答は常に将来に委ねられねばならないが、同時に現時点での回答を出し続けねばならない。ここでは、チベ

ット大蔵経の歴史と内容を概観する事を通じて、チベット大蔵経の位置づけを試みてみたい。

一、前伝期のチベット訳仏典

チベットに仏教が正式導入されたのは、ティソンデツェン Khri sron lde brtsan 王（七四二―七九七）が二〇歳の七六一年とされ、同王は同年に発した崇仏詔勅の中で、仏教を正式導入する決意を表明している。チベットと仏教の出会い、これ以前のソンツェンガムポ Sron btsan sgam po 王（五八一―六四九）の時代頃まで溯り、中国から入嫁した文成公主（一六八〇）によって中国

仏教が、ネパールから入嫁したティツワン Khri btsun によってネパール仏教が伝えられている。しかし仏典の学習や翻訳はティソンデツェン王代に至って漸くその緒につき、同王代のチベット訳仏典を敦煌資料中に見出す事が出来る。パティシク rBa Khri sgrags が中国仏教、パセルナン rBa gSal snan (一七九七) がインド仏教の導入に尽力し、中国からは良秀と文素らが、インドからはシャーンタラクシタ Śāntarakṣita とカマラシラ Kamalaśīla (一七九七) 等がチベットに招請されている。

当時のチベット訳仏典は訳語がまだ一定しておらず、訳文も原語をチベット語に置き換えた丈で、時に文意が通じなかったり、さらに文法的に誤った誤訳を含むものであった。仏教の学習が進み、翻訳技術が進歩するに従って、訳語が一定し、文法の理解が正確になり、従来の翻訳仏典に対する当然の批判が生じると共に、訳語や翻訳方法の統一が求められるに至った。それが八一四年に成立した『二巻本』語合『(北京版)一四四巻、五八三三番)であり、同書の翻訳規定と訳語は、それから一〇年

前後の後に成立したと推定される『(翻訳名義)大集』(『北京版』一四四巻、五八三三番)にも正確に反映しており、新「欽」定語 skad gsur bcad と総称される訳語体系の成立も八一四年と認められる。この新定語は、以後の仏典翻訳に決定的な影響を与え、現代の仏教研究者も『大集』を座右の辞書として常用するに至っている。勿論、当時まだそれ程は翻訳されていなかった論理学やタントラの用語には不備があり、『大集』とは異った訳語を、ごく僅かであるが、用いた翻訳仏典もある。当時そうした異訳語を用いた仏典は、新定語成立以前に翻訳されたものと、以後のものに分かれるが、前者はラトナラクシタ Ratna rākṣita 等の八〇〇年代初頭に活躍した翻訳師達のものであり、後者はペルツェク dPa'i Htogs 等の九世紀第二の四半期に活躍した翻訳師達のものである。従ってチベット訳仏典の研究に於ては、翻訳師とその活躍年代を確認しておかねばならない。八一〇一—一四年前後には上述のラトナラクシタ等が、八一四—二五年前後にはイエシェデ Ye shes sde 等、その後ルイゲンツェン Kluhi rgyal mtshan 等が、八二五—四

二年前後には同じくペルツェク、法成らが活躍している。

正式導入後のチベット仏教は、明らかに王室の保護統制下に置かれ、八一四年頃には僧官制度も確立するに至っている。僧官制度の詳細は不明であるが、現在わかっている所では、最高機関として世尊都僧統議會 boon idan ḥdas kyi rin lugs kyi ḥdun sa があり、世尊都僧統によって運営されていた。当時は翻訳と説教の僧が居り、翻訳師の長が三蔵法師 zhu chen gyi lo tsa pa であり、その下に翻訳師 sgra sgyur lo tsa pa が居り、三蔵法師は自己の論著を著述するに至り、或は「戒」師 mkhan po の称を得るに至るのである。僧官職の最高位は大徳同平章事 ban de bkah chen po la gtogs pa であり、当時の宰相の上位にまで位置するに至る。大徳同平章事と世尊都僧統議會の関係は必ずしも明らかではないが、『語合』の編纂は「戒」師のもとで翻訳師達が恐らく実務を担当して成立し、以後の新定語の決定は世尊都僧統議會と三蔵法師の諮問を受けねばならなかった。また説教僧の組織も全く不明であるが、大徳同平章事に

は翻訳を残さぬ者もあり、著作は全く残されていない。

八三六(四八〇)年、ペルツェク等によって一切経目録たる『デンカルマ目録』(『北京版』一四五巻、五八五一番)が編纂された。その内容は「勝法たる大小乗の経部と、大小陀羅尼と、百八御名号と、讃頌と、誓願と、吉祥(偈)と、律の蔵と、経部の注釈と、中観の論書と、禪定の文書と、唯識の論書と、論理の論典など」によって構成され、目録本文はさらに細分されている。或は上記項目だけが当初作成され、他は以後に細分付加が為されたと疑う事も出来るが、論証すべき論拠が明確でない。同目録は七百余の仏典を記載し、前伝期に翻訳された殆どの仏典を網羅しているが、敦煌資料などによって、さらにそれ以外にも翻訳仏典があった事が確認され、その多くは同目録成立以降の翻訳であろう。いずれにしても七百余の仏典が、九世紀前半の最大四〇年前後の期間に集中的に翻訳されたものである事は、訳語や翻訳方法の統一が徹底し、僧官制度が確立していたが故に為し得た事業であると推定される。八四二年には破仏(?)の王として著名なランニダルマ Glan Dar ma 王(八〇

九一八四二)が殺害され、チベットは以後百五〇年間の暗黒時代を迎える。この期間にタントラ仏教が盛んとなり、チベット東北部では中国仏教とタントラ仏教の習合が起こった様であるが、詳細は今後の研究課題である。

二、後伝期のチベット訳仏典

『デンカルマ目録』末尾には「翻訳未了の論書に」と項目立てして、中観と論理学の六(ノ九)種の論書が記載されており、現存の大蔵経によれば、それ等の論書の翻訳師は一〇世紀末から一一世紀前半に活躍した者達である。九世紀半から一一世紀に至る期間の仏教史は、前伝期と後伝期に於ける律の相承に間断を認めまいとするチベット仏教史家達によって、律の相承を中心として一方的に記述されているが、それは逆に当時のタントラ仏教の隆盛を示し、さらにチベット東部、東北部、西部に仏教活動の中心があった事を示している。前記の論書の翻訳も特に西部を中心にして為され、この前後から後伝期の翻訳活動も急激に発展した。前伝期の特質は顕教仏典の翻訳が中心であるのに対して、後伝期の特質は残余の

顕教仏典の翻訳は当然として、特に膨大なタントラ仏典の翻訳にある。著名なブトン Bu ston (一二九〇—一三六四)の分類によれば、タントラは作、行、瑜伽、大瑜伽(無上瑜伽)の四種に分類される。伝承によれば、前伝期には瑜伽タントラまでしか翻訳されなかったが、敦煌資料などによると、大瑜伽タントラの一部まで既に翻訳されている。後伝期には『時輪タントラ』の注釈に至る、現存する最大のタントラ仏典の叢書が、チベット訳仏典として蒐集されるに至るのである。

前伝期に翻訳されたと称されるタントラ仏典は、後代一五世紀にラトナリンパ Ratna gñin pa (一四〇三—一七八)によって『ニンマ派タントラ全書』として纏められ、古訳タントラ gsan shags sia hgyur と称された。一方、後伝期に翻訳されたタントラ仏典は新「訳」タントラ gsan shags gsar ma と称され、大翻訳師リンチェンサンポ Rin chen bzang po (九五八—一〇五五)に始まるとされる。伝承によれば、彼は一三歳で出家し、一八歳の時にカシミールに趣き、さらにインドまで至り、各地の学僧達に教えを受け、帰国してはガリ ri Na h is 地方

を中心に多数の寺院を建立し、仏教の復興に尽くしたと伝えられる。彼の翻訳仏典は顕密に渡っており、内容的にも量的にも以後のチベット仏教の動向に大きな影響を与えた。特に密教仏典では、瑜伽と大瑜伽タントラに属する重要な仏典を多数翻訳し、従来から伝えられていたタントラ仏教を修正し、以後のチベット仏教の展開に基本的典拠を与えた。

『デンカルマ目録』の翻訳未了の論書も、相前後してこの時期に翻訳されており、『時輪タントラ』関係のタントラ仏典なども引き続いて翻訳された様である。リンチエンサンポに続いて、多くの学僧達がカシミール、インドそしてネパールへと趣き、該地で多くの学僧やタントリスト達に教えを受け、帰国するや教えを広めると共に、翻訳活動を行った。またインド仏教が衰え、一二〇三年にビクラマシラー Vikramasīla 寺が破壊されるに至る前後には、チベットに招請された、さらにチベットに逃れて来たインド僧達もあり、彼等の助力を得て多数の仏典翻訳が行われたのである。

著名なアティーシャ Atiśa (九八二—一〇五四)は、招

請に応じて一〇四二年に西チベットに至り、死ぬまでの間にチベット各地を訪れ、講説や翻訳に努めた。リンチエンサンポも彼との共訳を残しているが、特にナクツォ Nag tsho とは多数のタントラ仏典と中観論書を共訳している。またアティーシャに教えを受けたドムトン bBrom ston (一〇〇四—一六四)はカーダム派 bkah gdam pa の祖と仰がれ、同派はのちにツォンカバ Tson kha pa (一三五七—一四一九)の改革を受けて、ゲルク派 dGe lugs pa に吸収される。またサキャ派 Sa skya pa のサパン Sa paṅ (一一八二—一二五二)は、チベットを訪れたシャーキャシュリーバドラ Śaṅkyaśrībhadra (一二七—一二二五)に師事し、サキャ派を改革し、マルパ Mar pa (一〇二二—一〇九七)はインド、ネパールに趣き、後にカーギユ派 bkah bgyud pa の祖と仰がれるに至った。ドムトン等にも翻訳仏典が残されているが、彼等の業績の中心は、各宗派の確立に求めらるべきであろう。

ゴク=レクパイシエーラフ rNog Legs paṅi ses rab はアティーシャに願って、ムブヤ Bhavya の中観論書

を共訳し、サンブ gSan phu のネウトク Ne'u thog 寺を建立した。また彼の甥ロデンシエラプ Blo ldan ses rab (一〇五九—一〇九) はカシミールへ趣き、論理学や唯識、中観に関する重要な翻訳を残している。彼は論理学を習得すると共に、特に弥勒の五法に精通したとされる。前伝期に最重視されたバブヤの経部中観に對して、後伝期には瑜伽行中観が重視されるに至り、中観自立派に属するこの二学派の序列が逆転しており、その経緯が従来は明らかにされていなかった。大きな可能性としては、経部中観と瑜伽行中観の二大学派の学系を保持していたサンブのネウトク寺に於て、この転換が為され、特にロデンシエラプの影響が多であったと疑い得る。彼自身の著作が伝存せぬ現状に於ては、状況証拠だけで具体的論証にまで及ばないが、彼の歴史的位置はこの疑いを充分に保証している。また自立派の二学系がネウトク寺に伝承され、ツオンカパに発するゲルク派に受け継がれている事は、ツオンカパがバブヤの外境論に近似した思想を保持し、ゲルク派が自立派の二学系の思想を伝承している事によって確認される。

後伝期の翻訳師として忘れてはならない者に、パツァプ = ニマタク [s]Pa tshab Ni ma grags (一〇五五—) がいる。伝承によれば、彼はカシミールに趣き、頭密の仏教学を習得したとされ、特に中観帰謬派の論師チャンドラキールティ Candrakīrti の論著を翻訳した事で知られている。周知の如く中観帰謬派の思想は、ツオンカパによって頭教學の最高思想に位置づけられ、以後のゲルク派、さらにチベット仏教頭教學一般に於て、最も重要な位置を占めるに至るのである。上記の翻訳師達を始めとして、プトン、ト = シュンヌベル hGos gZhon nu'dpal (一三九二—一四八二)、タラナータ Taranātha (一五七五—) などの著名な学僧を含む多くの者達によって、翻訳活動が続けられたのである。しかし前伝期の翻訳と比較すると、決して秀れたものではなかった。それは、前伝期の翻訳が吐蕃王国の全面的な支援に基づいて行われたのに対して、後伝期の翻訳が幾多の地方勢力や、個人的努力に基づいて行われ、特にタントラ仏典などが充分に理解されないまま、機械的にチベット語に置き換えられるなどした為である。

三、チベット大蔵経の歴史

七世紀後半以来、一六世紀に至るまで多数の仏典がチベット訳されて来た。九世紀後半から十世紀中の、いわゆる仏教暗黒時代に於てすら、その内容と質を問わぬ限り、幾多の仏典、特にタントラ仏典がチベット訳されて来たことと推定される。前伝期中に於て、既に訳語が新定語として公式に決定され、一切経目録が編纂されており、チベット訳仏典の一大叢書が成立すべき基礎は充分に整っていたが、その様な叢書が纏められていたとすべき典拠は明確でない。ただ敦煌資料を通覧すると、その用紙と書式が共通する一部の資料に注意を引かれるが、それ等も写経の一形式以上のものであると確認すべき論拠が何もない。従って大蔵経と称し得る叢書が具体的に成立したと確認するには後伝期を待たねばならないのである。

チョンデンリクレル bCom ldan rig ral の弟子にチム = ジャンペーヤン mChims hJam pa'i dbyans が居り、両者の弟子にウパ = ロセル dBus pa Blo gsal がいた。ジャンペーヤンは師の不興を受け、ナルタン sNal

tshab 寺を追われ、サキヤ Sa skya 寺に移り、機縁あつて元朝の仁宗 (一二二二—一二二〇在位) に招請され、そのラマとして遇される事となった。彼は使者に託して師に贈物をし、その不興を解こうと努め、さらにロセルにも大量の資料を送り、ナルタン寺に大蔵経を編む事を求めた。ロセル等は諸寺に蔵されていた多数の仏典から、より信頼出来る原本を得、それを底本とした筆写本によって、いわゆる「旧ナルタン大蔵経」を編纂したのである。大蔵経は同寺の文殊堂に蔵され、その後は多くの大蔵経が各地に蔵されるようになった。

シャル Zha lu 寺のプトンは著名な『仏教史』を著わし (一三三二)、その巻末に詳細な一切経目録を記載し、彼の仏典分類の基本を公にした。さらにナルタン寺から大蔵経の論書部を導入し、その重複を除き、不足を補う事によって、より整った論書部を編纂し直し、その『目録』を作成した (一三三五)。プトンの『目録』は以後に成立した大蔵経の論書部の構成に決定的な影響を与え、後代の版本の大蔵経論書部の構成は殆どこれに従っており、シャル寺の論書部は大蔵経の原本として重用される

のである。

ナルタン寺の仏説部はツェルパ・ゲワイロト Tshad pa dGe bhai blo gros によってツェルパ・グンタン Tshad Gun than 寺に導入され、その善住式にはプトンも出席し、依頼された仏説部の改訂への協力にも応じた様であるが、詳細は明らかでない。この仏説部がツェルパカンギル Tshad pa bkah gyur と称され、ナルタン寺のものと共に、以後の大蔵経仏説部の原本として重用されるに至る。仏説部の目録や構成の内容は、宗派の意向を反映するなど、論書部の場合程に統一されていないが、ツェルパカンギルを基礎にしたものが多い。以上に関連した大蔵経は、いずれも写本大蔵経であるとされ、写経の功德、廻向などの信仰に支えられて、版本の大蔵経を充分に利用し得る近代に至るまで、幾度も書写が重ねられて来ている。その一部がトク Tog 宮殿の写本や、東洋文庫蔵の写本の仏説部であり、近年これ等の写本に関する研究も公にされ始めている。

版本の大蔵経は、中国に於て最初に作成された。明の永楽帝（一四〇二—二四在位）の命により、ツェルパカン

ギルを底本として、一四一〇年に永楽版が開版された。万暦帝（一五七二—一六二〇在位）は永楽版の覆刻版である万暦版を一六〇五年に出し、万暦版統蔵を一六〇六年に出している。また清の康熙帝（一六六一—一七二二在位）は康熙版を一六八四—九二年に開版し、同版は一七〇〇年と一七二二—二〇年、雍正帝（一七二二—三五年在位）の一七三七年に覆刻されている。以上は仏説部の開版事情であり、論書部は雍正帝によって一七二四年に開版されている。これ等の中国で開版された大蔵経は北京版と総称され、近年出版された複製本が広く研究に利用されている。

一方チベットに於ける最初の版本は、同じくツェルパカンギルを底本としたジャン・hJan 版である。麗江 Jan sa tham 王の木増 Mu zen（一五八七—一六四六）とガルワン・チョエキワンチユク Gar dhan Chos kyi dban phyug（一五八四—一六三〇）の協力によって、一六〇八—二一（九八？）年に開版されたのがジャン版であるが、同版の版本が後にリタン Li than に移された為、リタン版と言う呼称でも呼ばれた。同版も仏説部の

みのものであった。

デルゲ sDe dge 王のテンパツェリン bstan pa tshen po（一六七八—）は一七二九—一三三年に仏説部、一七三七—四四年に論書部を開版し、これがデルゲ版と一般に呼ばれる大蔵経であり、仏説部はリタン版を底本としている。同じリタン版を底本として、チョネ Cho ne 版の大蔵経の仏説部が一七三三—四三年に、論書部が一七五三—七三年に開版されたが、論書部はデルゲ版論書部の覆刻であった。

一方ダライラマ七世（一七〇八—五七）の命によりポラネ・ソナムトブゲー Pho lha nas bSod nams stobs rgyas（一六八九—一七四八）がナルタン版を開版した。

仏説部は一七三〇—三二年、論書部は一七四一—四二年に開版され、底本としてはダライラマ五世（一六一七—一八二〇）の作成した写本大蔵経が重視されたようであるが、二の作成した写本大蔵経が重視されたようであるが、仏説部はツェルパカンギル、論書部はシャル寺の系統を受けている。最も新しくはダライラマ十三世（一八七六—一九三三）によって、一九二三年にラサ・lha sa 版が開版されているが、これは仏説部のみのものである。同

じく仏説部のみの版本として、一九〇八—一〇年にウルガ Urga 版が開版されており、ほかにクンプム skun dbun 版や、チャムド Cha ndo 版も開版されているが、後二者の詳細は不明である。その他プータンのプナカ Punaka 版があり、論書部も備えている様であるが、同じく詳細は不明である。

上述の如く大蔵経の編纂は一四世紀に至って漸く現実のものとなったが、元朝に越いたジャンペーヤン是中国に於ける大蔵経の盛行に刺激される所が大であったろうし、また彼を介した元朝からの資料援助があつて初めて、この様な大事業が実行されるに至つたのである。中国では既に宋代、一〇世紀以来、大蔵経の開版が盛んになつてしたが、開版には編纂に劣らぬ程の資力が必要であり、ダライラマ政権の発願になるナルタン版の開版についても、ポラネの尽力に預るなど、多くの困難を経ての完成であつた。

四、チベット大蔵経の内容

大蔵経は三蔵とも称され、経律論の三部から成る。チ

ベット大蔵経は、仏説部と論書部の二部に大別される。仏説部はカンギュルの訳であるが、カンギュルの本来の意味は「チベットに転変した仏説」であり、論書部はテシギル *bsTan bgyur* の訳であり、「チベットに転変した論書」が本来の意味である。これが各々「チベットに翻訳された仏説」、「チベットに翻訳された論書」の意味に常用されて、現在に至っている。仏説部には三蔵の経律の二部が含まれ、膨大なタントラも当然この中に含まれており、文字通り仏の所説を集めたものとして、歴史上の存在としての著者名は記されていない。論書部は三蔵の論と対応し、仏説部に対する注釈書類、仏教哲学各派の論書、その他の五明処に関する論書が集められており、歴史上の存在としての著者を持つている。

仏説部の仏典の配列は、既に閑説した如く、各大蔵経によって多少ずつ異っているが、顕教経典、タントラ、律に三大別され、顕教経典は小乗経典と大乘経典に分かれ、タントラは作、行、瑜伽、大瑜伽に分かれ、大瑜伽はさらに方便(父)、般若(母)、無二の三種に区分される。律は小乗仏教に属する仏典であるが、チベットでは

現代に至るまで小乗戒が伝持されており、詳細に研究されている。一般に利用される北京版の構成を見ると、第一にタントラ、第二に般若経類、宝積経、華嚴経、その他の諸経が収められており、諸経の中には小乗経典も含まれているが、その数量は少ない。第三に律が収められて、最後に仏説部の目録部が付されて終わっている。

論書部の仏典の配列は、既に閑説した如く、プトンの『目録』に従っており、各大蔵経によって多少の加脱はあるものの一定している。同じく北京版によってその構成を概観すると、第一に讃頌類、第二にタントラ注釈書類が収められ、第三に諸経の注釈書類が収められている。この第三の部分には、般若経の注釈書類、中観論書、諸経の注釈書類、唯識論書、阿毘達磨論書、そして律の注釈書類が順次に収められ、次いで本生、書翰、論理の論書が収められ、五明処の残りである声明、医方明、工巧明に続いて修身の論書、そしてその他の雑部が付加されているが、雑部の中には前伝期のチベット撰述仏典も含まれている。最後に論書部の目録部を加えて、論書部が終り、大蔵経が完成している。

大蔵経の翻訳仏典は、大部分がサンスクリット語から翻訳されたものであり、少数の漢文から翻訳された仏典の外、蒙古語やブルシャ語から翻訳されたとする仏典も含まれている。各々の仏典に付された奥書や、各々の目録部に記述された内容から、その仏典の著者や、翻訳師、その仏典が受けた改訂の事情などが、個々に明らかにされつつある。目録部の構成は各大蔵経によって異なるが、収載されている仏典の目録は当然として、その大蔵経が完成されるに至る縁起、さらに仏教史一般などが記述されており、大蔵経成立史の研究は勿論、チベット仏教史の研究などにも利用されている。プトンの『仏教史』も、インドとチベットの仏教史の記述は、次に記述される一切経目録の役割を果たしており、プトン以降に成立する大蔵経目録部と仏教史書類の構成は類似したものとなっている。勿論、前者は大蔵経の縁起や目録そのものが主要部分となり、後者は仏教史の記述が主要部分となっているのは自明の事である。

各大蔵経の成立事情も、目録部、仏教史書類、学僧達の伝記や聴聞録などの研究によって、次第に明らかにな

りつつあり、特に各大蔵経の相互関係や、版本大蔵経の覆刻、改訂の事情なども明らかにされつつある。また各大蔵経の目録も整備され、相互の対照表も公刊されるに至っている。さらに各大蔵経そのものの利用も、近年の複製出版やマイクロフィッシュ化によって、大幅に前進している。利用が進んでいるのは、特に版本大蔵経であり、写本大蔵経、さらに単行の写本や版本の仏典の利用は、まだまだ限られた範囲に止まっている。従って大蔵経内の個々の仏典の研究も、入手し得る幾種かの資料を対照し、異同を明らかにする程度である。

大蔵経に含まれる仏典の数は、各大蔵経によって相異しているが、仏説部は千百部前後であり、その内タントラが三分の二程度を占めている。論書部は三千五百部余であり、その内タントラ関係の仏典が六分の五前後を占めている。チベット大蔵経に於けるタントラ仏典の重要性が分かると共に、チベット仏教に於けるタントラ仏教の重要性も、同時に推定する事が出来るであろう。大蔵経の中には特殊なものとして、インド哲学派の論書や、サンスクリット文典、或はインド文学などの翻訳も

含まれており、それ等は決して多数ではないものの、チベット人がインド文化の導入に積極的であった点を見せつけられる。

五、チベット大蔵経の位置と諸問題

上述して来た如く、仏典の学習やチベット訳は、八世紀後半に開始され、九世紀前半中に顕教仏典の主要部分が翻訳され、一一世紀初頭以降、膨大なタントラ仏典を中心に、一六世紀頃まで翻訳活動が継続した。仏典の漢訳が宋代、ほぼ一〇——一一世紀に終了した点を考慮すると、チベット大蔵経の重要な特色が明らかであろう。即ち、九世紀以前に成立した漢訳仏典は、チベット訳仏典と比較して、より古いサンスクリット仏典の内容を伝えているのである。また一〇世紀前後以降に発展したタントラ仏典は、漢訳タントラ仏典と比較して、より広範囲、より大量にチベット大蔵経に伝存しているのである。現存のサンスクリット仏典、特にタントラ仏典の多くが近代の写本である事を考慮すると、チベット訳タントラ仏典はより古いサンスクリット仏典の内容を伝えて

いる事となる。従って漢訳、チベット訳、さらにサンスクリット語の仏典を比較対照する事によって、或る仏典の発達史を明らかにする事が出来、特に経典やタントラの研究には重要な視点を与えてくれる。その為には当然、各資料の成立事情が厳密に考証され、各資料の文面を相互に会通するのではなく、各資料の各々の読解が独立して為された上で比較対照が行われるのでなくてはならないであろう。

チベット訳仏典は新定語によって統一され、新定語は以後の翻訳に決定的な影響を与えた。ここで重要な点は、新定語の制定に至る翻訳規定が、あくまでもチベット語として分かり易く翻訳せよと規定している点にある。即ちチベット訳仏典は、従来一般に言われて来た様なサンスクリット仏典を機械的にチベット語に置き換えたものではなく、あくまでもチベット語として通じる文面として翻訳されたものである。漢訳仏典と比較すると、訳語が統一され、サンスクリット仏典に出来る限り忠実に従って直訳されたチベット訳は、確かにサンスクリット原典に近い文面を保存している。しかしそれ

は、チベット訳をサンスクリット文法に合わせて読解する事を許すものではない。勿論そうせねばチベット語として理解しかねる資料がないわけではないが、それは翻訳師の未熟さを示す事で、チベット訳の特質に数える事は出来ない。程度の差こそあれ、漢訳にも類似した事情がある。仏教漢文の如き仏教チベット語もあるが、それはサンスクリット語の關係代名詞や前接辞の翻訳方法など、限られた範囲のものに過ぎないのである。或るサンスクリット仏典に幾種類かのサンスクリットの注釈書が存在している如く、チベット訳仏典にも幾種類かのチベット撰述の注釈書が存在しており、それ等はチベット訳仏典の理解、解釈を異にしているものであり、サンスクリット原典の読解を問題としていたのではない。従って、ここでも我々は、チベット訳仏典をチベット語として読む努力を、要求されている事となる。

チベット大蔵経

大蔵経仏説部は旧ナルタン大蔵経、ツェルパカンギユルの系統を引き、論書部はシャル寺の系統を引き、その起源は結局一に帰してしまふ。大蔵経が書写され、開版され、覆刻される時には、校訂や改訂の手が加えられる

事もあったであろうし、その場合サンスクリット原典、幾種類かのチベット訳仏典との対照、さらに誤写されたとするべき字句の訂正などが行われる事もあった。事実、現存の大蔵経の各仏典の対照研究によって、その異同が明らかにされたものもあるが、起源が同一である以上のその異同も限られた範囲のものでしかない。しかし特に前伝期の翻訳は、仏教暗黒時代を経る事によって、落丁や乱丁した資料が後伝期に伝えられ、それがそのまま大蔵経に収められている実例も発見されている。その端緒となったのは敦煌資料との対照研究であり、敦煌資料には現代に未伝の仏典、異訳の仏典、また上述の如き同一仏典でありながら対照研究を必要とする仏典が多数含まれている。例えば現代に未伝の漢文チベット訳禪宗文獻、新定語制定以前八世紀後半の古い翻訳仏典、現存大蔵経ではサンスクリット語をチベット文字に転写した丈の陀羅尼を翻訳してある仏典、また上述の落丁や乱丁を訂正し得る仏典などである。後伝期の翻訳を含めて見ても、校訂や改訂が加えられる前後の両資料を比較する事によって、チベット訳仏典の発達史の一端を明らかにし得る

であろうし、起源を異にする資料を利用し得るならば、その研究は一層の進歩を示すであろう。チベット訳仏典の内容研究は、特に利用する資料の成立事情についての厳密な考証を伴わなければならない所以である。

チベット大蔵経はチベット仏教を支える重要な条件であり、チベット仏教はチベットの文化の中心的存在である。仏教はチベットに伝来し、定着し、発展して来た。伝来以来、チベットの仏教は時の政権と密接な関係にあり、ダライラマは政教両権を手にした。チベットの文化を担って来たのは、多数の秀れた学僧達であり、彼等は広い意味での仏教学、五明処を学習する事により、一切智者となる理想を追った。彼等の学習対象は究極的には大蔵経に収められた仏典であり、それ等の仏典に対する理解を深め、理想を実現せんとした。彼等の著わした諸注釈書類は、彼等の理解を明示している。いわゆるチベット撰述仏典と総称される膨大な文献群の大部分は、大蔵経中の各仏典に対する注釈書類であり、それはチベット仏教を形作り、チベットの文化を特徴づけている。チベット大蔵経の研究は、インド仏教さらに仏教一般を研

究する重要な資料である事は言うを待たないが、一方ではチベット仏教さらにチベットの文化を研究する重要な資料である。同じ資料を利用しながら、その研究目的に応じて、研究の方法論が異って来るのは当然であり、インド仏教を研究するに当たっては、チベット訳の陰にあるサンスクリット原典の姿を追求し、チベット仏教を研究するに当たっては、チベット訳を原典として、如何なる理解、如何なる思想が展開したかを明らかにせねばならない。この両面は矛盾するものではなく、相互に補い合うものであり、両面が整って初めてチベット訳仏典の位置と価値が決定される事になるであろう。

【補注】チベット大蔵経の歴史と内容を概観し、多少の問題提起をも行った。チベット大蔵経の研究は近年急激に発展して来っており、それ等の最新の研究成果を批判的に取捨して概説するよりも、大蔵経に関する基礎的情報を記述し、その取扱いの課題を気の付いた範囲で略述した。各項目に関連する研究論文等を以下に掲げて、本文の欠を多少とも補いたい。

一、前伝期のチベット訳仏典 チベット仏教史については、山口瑞鳳「チベット仏教」、『講座』東洋思想」第五卷、東京大学出版会、一九六七年、同「吐蕃王国仏教史年代考」、『成田山仏教研究所紀要』、『成田紀要』第三号、一九七八年

など参照。また前伝期の訳経史については拙稿「吐蕃王国訳経史」、『東洋学術研究』二二―二、一九八二年など参照。

『北京版』は西藏大蔵経研究会編『影印北京版』西藏大蔵経』一―一六八、東京・京都、一九五五―一六一年である。『大集』と新定語に関する筆者の見解に対する批判が山口瑞鳳「チベット仏教典籍解題」I、『成田紀要』第七号、一九九二年に示されるが、反批判は稿を改めて論ずる。『チンカルマ目録』に関して、羽田野伯猷「チベット流伝前期の王室仏教備考」、『中川善教先生頌徳記念論集』仏教と文化』同朋舎出版、京都、一九八三年があり、順次に細分付加が為されたと論じており、考察に価する所論である。敦煌資料については御牧克己「チベット語仏典について」、『続』シルクロードと仏教文化』東洋哲学研究所、東京、一九八〇年などに略説されている。

二、後伝期のチベット訳仏典 フォンにひいては D.S. Ruegg, *The life of Bu ston rin po che*, SOR, XXIV, Roma, 1966 など参照。『時輪タントラ』は羽田野伯猷「時輪タントラ成立に関する基本的課題」、『密教文化』八一―、一九四九年など参照。『ニンマ派タントラ全書』は K.W. Eastman 「チベット訳 *Gubyesmañjāntara* の敦煌写本」、『西藏学会々報』(『西藏報』) 第二六号、一九八〇年など、リンチェンサンボは稲葉正就「チベット中世初期における般若中観論書の訳出」上下、『仏教学ゼミナー』第四・五号、一九六六・六七年、川越英真「Rin chen bzang po 伝研究」、『印度学仏

教学研究』(『印仏研』) 三〇―一、一九八一年、同「Rin chen bzang po の訳経リスト」、『印仏研』三一―二、一九八三年など参照。アティーシャ、ドムトンについては羽田野伯猷「カーダム派史」、『東北大学文学部研究年報』第五号、一九五四年など、ツォンカバは長尾雅人「西藏仏教研究」岩波書店、東京、一九五四年など参照。サバン、シャキヤシュリーバドラは立川武蔵『西藏仏教宗義研究』第一卷、*Studia tibetica* 3, 東洋文庫、東京、一九七四年、羽田野伯猷「Kāsmīramahāpāṇḍita "Śākyasībhadrā"」、『文化』二二―五、一九五七年など参照。マルバは稲葉正就、佐藤長訳「フツラン・テプテル」法蔵館、京都、一九六四年など参照。イク・パツァブ、中観思想については稲葉「中世初期における般若中観論書の訳出」拙稿「チベット仏教の中観思想」、『(講座) 大乘仏教』七、春秋社、東京、一九八二年など参照。

三、チベット大蔵経の歴史 歴史にひいては御牧「チベット語仏典について」に略述されるが「近年の研究」Yoshino Imaeda, Note sur le Kanjur de Derge, *Taoist and Tibetan Studies*, Berkeley, 1982, do., *L'édition du Kanjur tibétain de 'Yang sa-tham, Journal Asiatique* CCXXX, 1982, do., *Catalogue du Kanjur Tibétain de l'édition de 'Yang sa-tham, Bibliographia Philologica Buddhica II a, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1982, Géza Bethlenfalvy, A Catalogue of the Ugya Kanjur in the Prof. Ragjnucwa Collection at the International*

Academy of Indian Culture, SPS 246, New Delhi, 1980 などがあり、写本大蔵経に關しても斎藤光純「河口慧海師 將來東洋文庫所藏」写本チベット大蔵経調査備忘」、『大正大学研究紀要』第六三輯、一九七七年、Helmut Eimer, Zur Beurteilung der Textqualität der Kanjur-Handschrift aus dem Palast in Tog/Ladakh, *Indological and Buddhist Studies*, Volume in Honour of Prof. J. W. de Jong, Cambera, 1982 などがあり、その他にも関連研究が多数ある。プトンの『仏教史』と『目録』については、羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起」一、『鈴木學術財団年報』三、一九六六年、西岡祖秀「プトゥン仏教史」目録部索引」I・II、『(東京大学文学部) 文化交流施設研究紀要』四・五、一九八〇・八一年など参照。

四、チベット大蔵経の内容 内容については、同じく御牧「チベット語仏典について」に略述され、前節に掲げた関連する諸研究をも参照されたい。

五、チベット大蔵経の位置と諸問題 筆者とは異った見解が、長尾雅人「山口先生のチベット学」、『西蔵報』第二四号、一九七八年に示されている。

(はらださとる・東方学院講師)